鶴山書院報

第20号

公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地３東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com
発行人
理事長 香月正則

家庭や地域の繋がりに 孔子の教えを

公益財団法人孔子の里
理事長　香月　正則
（多久市長）

近年、家庭や地域の繋がりが弱くなったと感じることが増えています。家族が同じ家に住んでいても会話は少なく、近所に住んでいても互いをよく知らないまま日々が過ぎることもあります。便利さが進む一方で、人と人との関係は、意識して守らなければ薄れてしまう時代です。だからこそ、孔子の教えを現代に生かす意味があります。

孔子が重んじたのは、相手を思いやる仁と、人との関係を整える礼です。仁は、単に親切であることだけではなく、相手の立場を考えて行動する姿勢を指します。礼も、形式的なあいさつや作法だけではなく、互いを尊重し、関係を穏やかに保つための心構えです。家庭や地域の繋がりが弱まりやすい今、この考え方は大切な支えになります。

家庭の中では、あいさつをきちんとすること、相手の話を途中でさえぎらずに聞くこと、感謝を言葉にして伝えることが、孔子の教えを実践する第一歩になります。親しい間柄ほど礼を忘れやすいものですが、だからこそ小さな気づかいが信頼を育てます。毎日の生活の中で相手を当然の存在として扱わず、敬意をもって接することが、家族の安心に繋がります。

地域でも、孔子の教えは生かせます。道で会ったときに声をかける、子どもや高齢者を気にかける、地域の行事に少しでも関わる。そうした積み重ねが、孤立を防ぎ、住みやすい地域をつくります。大きなことをしなくても、身近な人を大切にする姿勢が広がれば、地域の雰囲気は変わっていきます。

もちろん、昔の価値観をそのまま現代に当てはめることはできません。しかし、思いやりを心に持ち、それを礼ある行動として表すという孔子の教えは、今の家庭や地域にこそ必要です。社会を支える力は、遠い場所ではなく、身近な繋がりの中にあるのだと思います。

忙しい日常の生活の中でこそ、一度立ち止まり自分の気持ちと足元を見直す必要があるのだと感じます。

佐賀県内の亀趺碑について
公益財団法人 孔子の里事務局長　亀川　将平……2
佐賀藩成立以前の多久安順と鍋島氏
佐賀県立図書館 郷土資料調査・編さん課　野下　俊樹……4
草場佩川が見聞きした唐津の史話、名護屋城跡、小川島捕鯨
佐賀県立佐賀城本丸歴史館　企画学芸課長　安永　浩……6
草場佩川・船山周辺の唐津焼
佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員　芳野　貴典……8
水江龍造寺氏と松浦党・鶴田越前守前一族（一）
公益財団法人 孔子の里理事　服部　政昭……10
華表を仰ぐ（第七回）
多久市郷土資料館長　藤井　伸幸……12
歴史を紡ぐ孔子廟の絆
～未来へ向けた共通価値の創造～
公益財団法人 孔子の里事務局長　亀川　将平……13
2026年度 講座案内……14
来訪・来信・雑録、賛助会員入会案内、秋季釈菜案内……15
論語かるたゲームの紹介、編集後記、多久の百景……16

「参拝」（福岡県小郡市　絹川政憲）
多久百景写真コンテスト入賞作品

佐賀県内の亀趺碑について

公益財団法人 孔子の里事務局長　亀川　将平

はじめに

数年前、鹿島市浜町八宿の岩永幸太氏から『佐賀の亀趺碑を見て歩く～先人のあと慕いて～』（岩永幸太著）を賜りました。この冊子は、尾形善郎氏の『肥前の亀趺碑をめぐって』という記事を読み、興味を持った岩永氏が県内の亀趺碑を巡り、個人的にまとめられたものです。内容は県内に現存する十六基の亀趺碑とその詳細で、後述として、いくつかの検証と疑義が記載されています。

その本文冒頭に、「この小さなプリントが亀趺碑に興味を持たれるきっけにとでもなることができれば幸いである。」と記載されており、私が勝手にその想いを継いで調査した結果の一部をご紹介いたします。

亀趺碑（きふひ）とは

亀趺碑とは、中国の伝統的な石碑の形式の一つで、「亀の形をした台座（趺）」の上に、長方形の石碑を立てたもののことです。この台座は普通のカメではなく、中国神話に登場する「贔屭(ひいき)」という聖獣で、重いものを背負うことを好むという性質から、石碑を支える役目を担っています。

亀趺碑は全国に存在しているが、決して「どこにでもある」ものではなく、儒教を重んじた藩や人物ゆかりの地に多く建立されています。

中国明代では、一品から三品（高官）のみ亀趺を用いることが許されていました。日本においては、厳格な身分制限を制度として運用されてはいないものの、「礼」を重んじる儒教的知性の反映として、それに相応しい場所や人物に用いられていきました。

亀趺碑の始まり

亀趺碑は、中国発祥で、南北朝時代（四三九－五八九）に始まったとされています。しかし、日本で盛んに作られたのはずっと時代が下がった近世、江戸時代前半以降になり盛んに作られています。

その理由の一つとして、寺請制度があります。この制度は、すべての庶民がいずれかの仏教寺院に所属することを義務付け、身元を証明する仕組みのことです。江戸時代になると寺請制度に支えられて多数の寺院が建立され、寺院に付属する寺院墓が普及し、遺体はお寺に埋葬されることが多くなります。また、戒名がつけられ墓標を建てることが一般化したことにより、大名も含めた多くの人が、それぞれの墓に何らかの独自性を求めるようになり、この亀趺碑の建立も独自性の表現の一つとして用いられたと考えられます。

盛んになるもう一つの理由として、明から渡来し、日本に黄檗宗を広めた隠元隆琦（一五九二－一六七三）の存在が大きいと思います。隠元は、大名・文人・庶民に至るまで、建築、書、食に大きな影響を与え、伝統的な美意識と鮮やかな感性を加え、江戸文化の装いを劇的に変化させた結果、亀趺碑が作られるきっかけにもなったと考えられます。この隠元が黄檗宗の大本山として開創した萬福寺（京都府宇治市）には、「特賜大光普照國師塔銘」と刻まれた亀趺碑があります。

日本において、最も有名な亀趺碑は、湊川神社（兵庫県神戸市）にある楠木正成を顕彰した「嗚呼忠臣楠木之墓」（一六九二年建立）かと思われます。当時、徳川光圀は隠元を深く崇敬し、黄檗宗を厚く保護しました。光圀は隠元がもたらした大陸文化を重んじ、自身が「忠臣の鏡」と表した人物の碑が亀趺碑であることは自然なことと考えられます。

基礎資料について

県内の亀趺碑の調査をするにあたり、基となる資料は古いものから次のとおりです。

①二〇〇七年 『肥前の亀趺碑をめぐって』
葉隠研究 第61号 尾形善郎著
（16基について記載あり）

②二〇一四年 『醫王山石長寺』
佐賀市埋蔵文化財調査報告書第84集
佐賀市教育委員会編
（19基について記載あり）

③二〇一七年 『佐賀の亀趺碑を見て歩く』
岩永幸太著
（16基について記載あり）

②の『調査報告書』を作成した経緯について問い合わせたところ、①葉隠研究の記事を見た人から、新たに県内の亀趺碑の情報が教育委員会に入ったため実施したとのこと。①では16基だったが、②の報告書を確認すると新たに3例（全部で19例）の情報が追加されていた。

さらに、三年後の③の調査では、所在不明になった碑（3基）の情報と、新たなに発見された碑（1基）が記載されている。なお、③の調査を行っている際は岩永氏個人が行ったため、②の存在は知らなかったと推測している。

亀趺碑の現地調査

現在、県内の亀趺碑について調査を進めており、鹿島市に新たに1基発見し、現在20基を確認できた。所在不明の亀趺碑については、取り片づけられていたり、道路工事のため解体されていたりしており、先人たちの想いと技が消えつつある。次に県内のいくつかの亀趺碑を紹介する。

（一）石長寺中興記碑 享保十四年（一七二九）

所在地　佐賀市赤松町
建立年代　享保十四年（一七二九）
寸　法　20×70×180（cm）
亀　石　90×55×22（cm）

②のタイトルにもなっているこの亀趺碑は佐賀市の佐賀大学側にある石長寺に建立されている。③の資料では工事中のため確認できなかったとあったが現在は道路工事も完了しており、寺院内にこの亀趺碑を確認することができた。①の資料には「…傍らにその亀首が副えられている。」とあり、探したのだが見つからず。寺院内及び周辺まで見回ったが発見することができなかった。後日入手した②の調査報告書にも亀首を探した記録があった。当時は調査員に加え、住職も一緒になって丁寧に捜索したが発見に至らなかった模様が記載されていた。

（二）大寶聖林碑 正徳三年（一七一三）

所在地　多久市多久町
建立年代　正徳三年（一七一三）
寸　法　90×30×203（cm）
亀　石　198×90×20（cm）

この碑は、佐賀藩の儒学者　武富威亮が七十七歳の時（一七一三年）に、聖堂を営んだ記念として建立されたもので、今は多久の西渓公園内にある。（碑が移設された経緯については、『鶴山書院報第18号』「大寶聖林碑はなぜ多久にあるのか？」をご覧ください）

碑面の大宝聖林とは現在の佐賀市大財町にあった大貳聖堂のことである。現時点では、石長寺の亀趺碑より古く、県内で最古の亀趺碑であり、国内の他の孔子廟、聖堂に亀趺碑を備えた形跡はない。

特徴は台座の贔屭が11石の組み合わせでできていることで、亀趺碑で見られる贔屭のそのほとんどが1石から作られており、全国的にも珍しいと思われる。

【参考資料】

『肥前の亀趺碑をめぐって』（尾形善郎著）
『醫王山石長寺』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第84集
『佐賀の亀趺碑を見て歩く』（岩永幸太著）
『亀趺をもつ石碑の系譜』（藤井直正著）
『亀の碑と正統』（平勢隆郎著）

佐賀藩成立以前の多久安順と鍋島氏

佐賀県立図書館 郷土資料調査・編さん課
野下　俊樹

はじめに

龍造寺長信の嫡男家久（安順）は、龍造寺・鍋島家の談合に関与した人物として著名である。

多久家の概要は、『多久家文書の「読みなおし」』（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二－一）にまとめられており、多久安順の事績については、「長信の嫡子で、その家督を天正十八（一五九〇）年に引き継いでいた安順は、他の多くの龍造寺一族と同様に、直茂およびその嫡子鍋島勝茂による藩政運営に協力的な姿勢を取り、その後の鍋島氏中心の佐賀藩の体制を支えていく役割を率先して果たした」と整理されている。とりわけ、龍造寺高房が逝去した際には江戸幕府との交渉役を務め、鍋島勝茂を藩主へと推薦したこと、草創期佐賀藩において諫早直孝・鍋島茂綱・須古信明とともに談合による藩政運営を行ったこと（「多久家文書」二七四号等。以下、単に多久●号等と略す）、寛永十一年に龍造寺伯庵が江戸幕府に龍造寺家再興を訴えた一件への対応等はよく知られている。

一方で佐賀藩成立以前における多久安順の立場に言及した研究は意外に多くない。

小稿では、佐賀藩成立以前の安順の立場について鍋島氏との関係から卑見を述べる。

一　龍造寺長信と多久安順

天正十八年正月八日、豊臣秀吉は龍造寺政家の隠居に伴い龍造寺高房に総高三十万九千九百二石の知行割を送付した。それには龍造寺高房の直轄地や龍造寺政家の隠居領、そして重臣たちへの配分が記されている（「鍋島家文書」公益財団法人鍋島報效会蔵）。

この時知行を書き上げられた龍造寺重臣は、鍋島直茂、鍋島勝茂をはじめ、「龍造寺六郎次郎」（多久安順）・「龍造寺七郎左衛門」（諫早・龍造寺家晴）・「後藤善次郎」（武雄・後藤家信）・「龍造寺阿波守」（須古・龍造寺信周）・「神代二郎」（川久保・神代家良）であり、多久安順には一万七十石が与えられている。彼らは土地の自治権を有する〈大配分〉と位置づけられ、本史料によって多久安順が龍造寺長信の継承者として龍造寺家中に位置づけられていることが分かる。

では、鍋島直茂・勝茂にとって龍造寺長信や多久安順はどのような存在だったのか。

【史料一】鍋島直茂書状（坊所鍋島家文書七二号）

（端裏書切封上書）
「（墨引）　　生三まいる　　加」

又、長州（多久安順）・主殿（鍋島茂綱）へも右之分可相達候〳〵、
天理様（龍造寺長信）・十左衛門尉殿（後藤家信）ゟ被遣候香銭之事ハ、何方ニ相替儀候間、しかと留置候而可然存候、又我等其元可参儀者、時分見合候て可承候、前を以可被申候〳〵、恐々かしく、

十日　　加（鍋島直茂）（花押）

【史料一】は、多久安順が「長門守」を名乗っていることから慶長十二年以降、龍造寺長信存命中であることから慶長十八年以前の発給である。鍋島直茂は、鍋島生三（道虎）に対して龍造寺長信と後藤家信から送られた香銭は他者のそれとは異なるため間違えることのないよう注意し、そのことを多久安順と鍋島茂綱にも共有するよう伝えている。佐賀藩において龍造寺長信と後藤家信が他者とは区別される存在であるとの直茂の認識が示されている。

二　書札礼からみた鍋島勝茂と多久安順の関係

また、多久家に伝来した「多久家文書」の内容や年次等の再検討の成果を参考に鍋島勝茂が多久安順に挙げた文書を編年で整理すると、右にみた関係性は、初代佐賀藩主鍋島勝茂が多久安順に発給した文書の書札礼にも表れていることが確認できる。

【史料二】鍋島勝茂書状（多久一八〇号）

以上

態申入候、御帰朝之由其聞候、事実候哉承度候、此中別而御苦労之至、不得申入候、加州事、近日可罷上之旨御諚候処、重而可相扣之通、被　仰出、迷惑無此上候、次、不思召寄儀ニ候へ共、与州ゟ御所持之由候巣はい鷹、逸物之由承候間、少々見申度候、向後、被下候儀ハいかゝに候間、先以御上せ候者可為本望候、定而御秘蔵察申候、何も木四郎兵相含候、恐惶謹言、

六月十八日　　鍋信濃守
　　清茂（花押）（勝茂）
龍六郎次様（多久安順）
人々御中

【史料三】鍋島勝茂書状（多久七六号）

「（端裏結封上書）（多久安順）龍与さま人々御中　（鍋島勝茂）信の、守」

（墨引）御やとに御座候由承候間、一筆令申候、陳こしらへなされ候や、承度候、御隙ニいつにてもちと御出まち申候、我等煩いまた然々共無之、めいわく体候、あまり〳〵無音申候間如此候、恐惶かしく、

十月廿九日　　勝茂（花押）

編年の参考となるのは、文書の内容と多久安順の名乗りの変化、差出である鍋島勝茂の花押型である。名乗りの変化については、多久安順は、はじめ「六郎次郎」を名乗り、次いで慶長五年三月二十七日以前に「与兵衛」、そして、慶長十二年九月二十五日から同年十二月二十七日までの間に「長門守」へと変化する。また、鍋島勝茂は花押を複数使用しており、文書を編年で整理する上で参考となる。

上記方法によって鍋島勝茂から多久安順に宛てた文書を整理すると、鍋島勝茂の藩主就任を契機とした書札礼の変化が想定できる。

その一つは書止文言である。鍋島勝茂が多久安順に宛てた文書のうち、慶長元年から慶長十二年の文書では、「恐惶謹言（恐惶かしく）」（多久一八〇、二八九、一五、二七、七六、七〇、八六、九七、七一、七五、七八号）と「恐々謹言」が混在しつつ用いられているのに対し、慶長十二年以降の文書では「恐々謹言（恐々かしく）」のみ用いられている。書札礼上は薄礼化している。

宛所の書様も変化している。慶長元年～十二年の文書では、【史料二】・【史料三】のように、ほぼ全て「人々御中」という脇付が用いている。これは、受給者（この場合は多久安順）本人に直接宛てず周囲に取次を乞う意味を込めたもので比較的厚礼な敬意表現である。一方、慶長十二年以降の文書では、多久安順と鍋島茂里に宛てた一通（多久四二三号）を除き「まいる」のみ用いられるようになる。

なお、宛所については、【史料二】・【史料三】をはじめ数例ながら敬称としての「様」の使用が確認できる（多久一八〇、二八九、七六、九七号）。龍造寺・鍋島氏は「殿」と「様」を使い分けており、例えば（文禄五年）六月二十一日付で後藤家信・須古信明・多久安順・龍造寺信房ら龍造寺重臣は「藤八様」（龍造寺高房）と「加賀守殿」（鍋島直茂）に加えて「鍋島信濃守殿」（鍋島勝茂）に対しても二心や野心無く身命を尽くして奉公することを起請している（「五番御掛硯方誓詞書写一」五〇号）が、その中では当主龍造寺高房には「様」を用い、鍋島直茂・勝茂には「殿」を用いている。

龍造寺氏当主を支える鍋島直茂・勝茂の地位は、重臣層の支持に立脚しているから多分に不安定であり、時により当主の地位・権限の簒奪を警戒されることもあった。鍋島勝茂が多久安順に厚礼の書札礼を用いている理由は、こうした事情に加え、龍造寺長信が龍造寺隆信と同母であるという点に求められよう。寛永十一年（一六三四）、龍造寺伯庵が御家再興を訴えた際、多久安順は「某親ハ龍造寺長信ト申候テ、隆信一腹一生ノ弟ニテ御座候」（「勝茂公御年譜四」『佐賀県近世史料一・二』）と述べ、龍造寺氏再興を訴える伯庵の主張を一蹴した。右の書札礼から考えれば、この自認は多久安順の認識や後世の創作というよりは同時代の共通認識だったとみてよい。

慶長十二年、鍋島勝茂が藩主を継承すると、多久安順は姓を「龍造寺」から「多久」に改めている。それは鍋島氏への配慮にほかならないが、一方で、血縁的には安順は藩主就任後も配慮されるべき血筋であった（【史料一】）。

佐賀藩成立後、鍋島勝茂は鍋島生三（道虎）らに「太閤様」（豊臣秀吉）から頂戴した石高「三拾万九千石」を記した朱印状を江戸に送るよう指示している（坊所鍋島家文書二七二号）。これは公儀への提出を目的としたものだが、一方でその朱印状には〈大配分〉の知行地をも列挙されており、龍造寺氏重臣の自立性を公儀が証明した根拠にもなった。結果、鍋島氏と龍造寺一族の関係性は、〈親類〉・〈親類同格〉・〈家老・着座〉といった佐賀藩の権力体制に包摂されつつも残存した。鍋島勝茂の藩主就任を契機として主従関係が変化し、それに伴い相応の書札礼に変化したものの、血縁に基づく関係性は維持されたのである。

以上、多久安順の立場について卑見を述べた。多久安順の政治的役割については、以前にも少し紹介したことがある（拙稿「龍造寺隆信歿後の龍造寺氏と多久安順」『鶴山書院報』第一八号）。多久安順は龍造寺長信から継承した血縁に加えて、幅広い教養によって龍造寺・鍋島氏から重んじられ、それは、書札礼と龍造寺家中における政治的地位として現出した。

【付記】

小稿は、科学研究費基盤研究（C）「近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化－佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として－」（23K00809）の成果を含む。

草場佩川が見聞きした唐津の史話、名護屋城跡、小川島捕鯨

佐賀県立佐賀城本丸歴史館　企画学芸課長　安永　浩

儒者・草場佩川

草場佩川（通称磋助、一七八七～一八六七）は多久家家臣・草場家の次男として生まれ、八歳で東原庠舎に、文化元年（一八〇四）には十八歳で佐賀藩の弘道館に入学した。漢詩・書画などに秀で、清音（中国語）にも通じた彼の名声が大きく知られる契機となったのは、文化八年（一八一一）の朝鮮通信使の応接である。

朝鮮通信使は朝鮮国王から江戸幕府の将軍への国書を携えて来日する使節団で、国書交換のみならず文化交流を行うため儒者や画員、楽団なども帯同した。江戸時代最後の派遣となった同年の朝鮮通信使は、財政的な理由などもあり、江戸ではなく対馬での対礼（易地聘礼）となった。その二年前に昌平黌へ入学した佩川は、昌平黌の儒官で幕府使節団の一員となった佐賀藩出身の古賀精里に同行して対馬へと赴き、そこで朝鮮国側の儒者と筆談や漢詩唱酬などを盛んに行った。彼らは二十五歳の佩川を「奇才」と激賞、その才能を高く評価したのである。

その後彼は多久の東原庠舎で教え、天保五年（一八三四）からは弘道館に奉職、安政六年（一八五九）には弘道館教授となった。

二度の唐津紀行と捕鯨への関心

佩川は生涯にわたり膨大な日記や紀行文を記したが、小稿で紹介するのは文政三年（一八二〇）の七日間にわたる唐津領内の旅の紀行文「松浦古跡付捕鯨記事」（多久市郷土資料館蔵）である。旅の最大の目的は呼子の北に浮かぶ小川島での捕鯨見物だったが、その前後の道中で見聞きした旧跡や史話・伝承なども丁寧に採録しており、江戸時代後期の唐津地方の地誌としても貴重である。

実は遡ること九年前、彼を捕鯨見物へと駆り立てることになる体験があった。朝鮮通信使応接に伴い江戸から対馬へ向かう途上、使節団一行は船の風待ち等のため、呼子に十三日間、壱岐に八日間逗留した。その時の様子は彼の紀行文「附驥日記 西」に詳しい。

呼子では、湾内にて「捕鯨の真似事」が披露され、矢の如く軽快に進む鯨船や気勢溢れる銛打ちの所作を目にした。また、壱岐勝本浦では鯨組主・土肥家の屋敷に投宿し、島人から捕鯨の委細について詳しく聞き取っている。しかしこの時はすでに捕鯨の漁期は終わり、その実景を目にすることはできなかった。

洋上で巨大な鯨に挑む捕鯨業は、江戸時代の人々にとって大変な興味・関心の的であり、多くの文人墨客が各地の鯨組を訪れたほか、捕鯨の様子を描いた図説は多くの写本が作られた。佩川も呼子や壱岐での見聞を通じて、鯨捕りの実見を熱望したであろうことは想像に難くない。文政三年の唐津紀行は、佩川にとって待ちに待った捕鯨見学だったのである。

文政三年の唐津紀行

紀行文の冒頭は「観鯨雑録　島人ノ鯨ヲ捕ルハ梅花ノ盛リヲ時トスト聞マヽニ游ヒ観ハヤ」と始まる。捕鯨の漁期に合わせた旅で、佩川の師で後に「丹邱邑誌」を著した深江簡斉（当時五十一歳）や、教え子の西鼓岳（同十八歳）らが同行した。ちなみに佩川は三十四歳、相知から合流する進藤確斎は六十一歳であった。（いずれも数え年）

一月十六日早朝に多久を発った一行は、伝説で有名な松浦佐用姫の出身地と伝わる笹原を越え、かねて親交のあった相知の教育家・進藤確斎の学慮を訪ねて彼も旅に加わった。また相知では文禄・慶長の役での朝鮮国被虜人らが故郷の風景に似ていると懐かしんだという「チャンコクワイ」の伝承を記している。久保川を渡って岸岳の古城を望みつつ進み、和多田を経て夕刻に唐津城下に到着、酒造業を営む刀町の菊屋に投宿する。唐津城についても言及があり、築城に伴い松浦川河口を城の西側から東側に掘り変えたこと、そのため旧流路の左右にあたる二ノ丸と三ノ丸では氏神が鏡神社・唐津神社と異なっていることなどに触れている。

十七日、佐志・唐房・八床峠を経て呼子に至る。呼子は「壁（加部）島、殿ノ浦ト三ツ対ヒノ浦ニテ、舟繋リイカホドモ宜キ浦」で、「小川島鯨社ノ長」中尾甚六の豪家があった。木屋に宿した一行は小川島への一刻も早い渡航を望み、夕刻に舟人に掛け合うが「逆風ナレハ夜船覚束ナシ、朝夕のナギヲ待玉へ」と制止された。そして翌十八日の早朝、舟人の迎えで呼子を出港、「月残リ風恬カ」な中を進み、ようやく待望の小川島に達した。

小川島には都合一日半滞在し（次頁で詳述）、十九日午後に加部島へ向かい、雨の降る中で田島神社に詣り佐用姫祠や望夫岩を見学。庄屋宅に寄った後、名護屋へ船出したが「逆風暴雨一倍シテ期スル方へハ思モヨラズ」、結局呼子の酒井屋に宿した。

二十日朝、再び船で名護屋へ向かい、「神君」（徳川家康）、「仙台侯」（伊達政宗）らの陣跡を海から望んでいる。上陸すると確斎の親類の庄屋・麻生清左衛門宅を訪ね、早々に名護屋城跡へと歩を進めた。水手口→本丸→三ノ丸→二ノ丸→水手口→山里丸と

巡り、本丸で拾った桐文と菊文の古瓦のスケッチを残している。また、本丸西北隅の天守台に「番所」があったこと、三ノ丸や二ノ丸での井戸の存在、広沢寺の「豊公ノ手栽」の蘇鉄のスケッチなど貴重な情報を豊富に記している。さらに、「縦横三四里ノ間、ミナ兵ヲ屯スルノ遺墟タリ。ソノカミノ壮図英略想ヤラル、光景ナリ。寛永中、原ノ古城ニ拠シ邪蘇ノ賊平ラキテ、後ソノ塁ヲ毀タラレシトナリ。」と名護屋城跡・陣跡のスケールの大きさに驚嘆しつつ、島原・天草一揆後に石垣等が破却されたとの伝承も伝えている。

二十一日、名護屋を発った一行はいわゆる太閤道をたどり、宇喜多秀家・藤堂高虎・立花宗茂・石田三成・結城秀康など錚々たる参陣武将の陣跡を横目に、唐津城下へと向かった。佐志峠では、唐津城や湾内の島々、松原と海の絶景を「真ニ一湾ノ虹ノ如シ」と評している。唐津城下を経て、町田村で旧知の庄屋・櫻井氏を訪ね、暮れに相知まで戻ったが、最後は雨に遭い「暗キヲ衝テ路ヲ走セタリ」という強行軍であった。

そして翌二十二日、夕方まで進藤確斎と語らい「唐津へ償フ書画ナド筆遊(スサ)ヒ」して、多久へと戻ったのは「夜ノ二更」(十時頃)であった。

佩川の見た小川島捕鯨

小川島での捕鯨見物のくだりは紀行文の三分の二近くを占め、図も交えて緻密に記録している。

江戸時代の小川島周辺の海域は、北部九州沿岸・島嶼部一帯で栄えた捕鯨(西海捕鯨)の中でも屈指の好漁場で、鯨の回游する冬季から春季に小川島を拠点に鯨組が操業を行った。捕獲対象はセミクジラやザトウクジラが中心で、海上に弓なりに張り広げた網へと鯨を追い込み、動きを止めて銛や剣で突き捕った。捕獲後は小川島の納屋場で迅速に解体され、鯨肉や鯨油の製造が行われた。沖場(捕獲部門)・納屋場(解体加工部門)で合わせて千人近くが従事し莫大な利益と雇用を生み出す捕鯨業は、唐津藩そして地域にとって重要な一大産業であった。

さて、十八日朝に一行が小川島に着くと、幸運なことに早速鯨発見の報を耳にする。山に駆け上り目にした一部始終を佩川は次のように記す。

「島ノメグリニ備ヘタル邏舟(セコ)、最初山ノ手ノ一声ヲ合図ニ漕出シタルガ、ハヤ鯨ニ取付テ次第ニ追来ル。老爺舟(ラウヤヂ)ヨリ白麾(ザイ)ヲ揮(フリ)テ諸船ヲ左右シ、鯨路ノ変転ニ随ヒ魚鱗鶴翼トモ云ベキ行伍ノ開闔アリテ、一里ホド西ナル加唐島ノ大泊ニ目当テ、魚ヲ囲ントミナミナ舷ヲ打ツ。ソノ響キ夥シ。此時網ヲ積シ双海舟ハ、遥カ加唐ノ北ニ両隊分レ備ヘタリシガ、指揮ニ応テ双ヨリ出アヒ、網ヲ繋キ合セ互ニ開ク。如此網ヲ張ルコト三重、鯨舷ヲウツノ声ニヲソレ遁レントシテ此ニ罹ル。コノ時遠見ノ老手(ラウヂ)ヲ拍テ、魚ハ今網ニカカレリ、上首尾ナリト悦ベリ。ヨテソノ方ヲウチ看ヤルニ、波荒タチテ舟ノサマイト忙シク、各々手ヲ砕キ毛利ヲ抛ツノ勢アリ。惜ラクハ近ク諦視(ミトメ)ガタシ。暫アツテ、一頭ノ鯨シハシハ潮ヲ吹キ、島ノ汀ニ向ヒ来ル。コレ網ヲ破リ鉾ヲ負フテ遁ルモノニテ、其勢ヒ猛烈ナリ。カクソレタル寸ハ一泳ニ数十程ヲ過ルガ故ニ、舟ノ追ヒ及ベキニ非ズ。ミナ惜キモノ哉ト云テ逃シタリ。モト囲ミ得タルハ魚二ツニテ、一頭ハスデニ捕ハレタリ。」

陣形を整えて鯨を加唐島東の網代へと追い込み、網船は二艘一組、計六艘で網を三重に張り広げ、鯨が網に掛かると一斉に銛を投げ打つという一連の捕獲工程を目の当たりにした彼の興奮が伝わってくる。この鯨は銛を負いながらも結局網を破って逃走し捕獲は叶わなかったが、同時に追い込んだもう一頭は捕獲に成功した。なお、彼らは翌朝にも鯨の追い込みを山上から目撃できたが、この時は結局鯨が網の下を潜り抜け逃している。

その後は鯨の解体を見学し、轆轤(人力のウィンチ)を使った鯨の解体や、子供らが包丁を手に鯨肉を切り盗む行為「カンダラ」などを興味深く書き留めている。また、その晩には新鮮な鯨の生肉を御馳走になり、「甚ダ旨美」と賞している。

翌十九日、再び案内を得て納屋場を見学した。中心施設で「油ヲ煎スル所」の大納屋は脂身の加熱のため二十もの竈を備えた大規模な施設で、他に骨納屋や筋納屋・脇腹納屋・顱納屋・道具納屋などもあった。骨納屋では「骨ヲ削ラシム婦女老若数十人、奈刀ノヤウナル庖丁ヲ執リ、壁ニ向テ並居、歌ヲ唄ヒ、拍子ニツレテ一度ニ打ケヅル」様子を目にする。煮出して採油するため骨を鉈で細かく削る作業は女性が従事していた。現在でも小川島に伝わる「鯨骨切り唄」は、この作業の音頭取りで歌われたものである。

また佩川は、当時の鯨組経営に関する重要な情報も書き残している。例えば、「一魚ノ価銀凡十七八貫目ニ及フ。大抵二十五頭(ホン)ヲ得レハ諸費用ニ充(ミ)ツヘシ。ソノ余分ヲ以テ利潤トス。」という。現代の貨幣価値で銀一匁を千二百五十円と仮定すると、鯨一頭の売上は約二千二百万円、一漁期の鯨組経営に必要な額は約五・五億円にもなる。この頃の小川島漁場ではたびたび五十頭以上の漁獲が記録されており、鯨組の繁盛ぶりがうかがい知れる。

佩川の豊富な知識と表現力、そして確かな情報収集と観察眼に裏打ちされた紀行文は、往時の捕鯨業の実態や唐津地方の姿をありありと私たちに伝えてくれる。機会があればぜひ、彼の旅の足跡をたどってみてはいかがだろうか。

参考文献:安永浩「資料紹介「松浦古跡 付捕鯨記事」草場佩川が見聞きした松浦地方の史話、名護屋城跡、小川島捕鯨」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要第二七集』(二〇二一)

註:引用文中の句読点や括弧は筆者が付した。

草場佩川・船山周辺の唐津焼

佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員　芳野　貴典

一六世紀末に唐津・北波多の岸岳一帯で始まった唐津焼（肥前陶器）は近世を通じて現在の唐津市域のみならず伊万里、武雄、有田、嬉野さらには長崎方面にまで生産地が広がった。製品の種類も茶陶のほか献上品から甕・鉢などいわゆる雑器に分類されるものまで多様である。多久はその主要な産地の一つであるが、同時に隣接する唐津藩領から人の往来に伴って様々な唐津焼製品がもたらされた。草場佩川・船山父子の日記には陶磁器関連の記事がいくつか見られるが、そこからは近世唐津焼の肥前地域での流通や受容の一端を知ることができる。

朝復屈・多二子詩二首・詩三幀及蘿蔔・・・此日、屈・多二友特遣人贈詩画及漢津窯肉盒一・碗五及鰒魚

（文化一三年二月一八日条）

「屈・多」のうち「多」は唐津藩領の儒者山口葛山を指し、旧姓が河多であることによる。字は士幹・子幹、領内で私塾を開き後進の教育に当たった人物である。佩川が屈某と葛山に詩と蘿蔔（大根）を贈ったところ、同じ日に人を遣わして詩画と唐津焼の「肉盒」一点と碗五客、鰒魚（アワビ）の返礼があった。

「漢津」は唐津のことで、嘉永～安政年間に成立したと考えられる筆者不明『肥前名物題註』「磁器」の項でも「日祖韓役所俘明人呉祥瑞・渤澥某等始陶於漢津（藩祖鍋島直茂が文禄・慶長の役で捕らえた明人呉祥瑞と渤海某らが唐津でやきもの作りを始めた）」と記されている。なお、呉祥瑞と渤海某を肥前陶磁の祖とする伝承は現代からすると俗説の類というほかないが、文禄・慶長の役の被虜人が最初に唐津地方で陶器生産を始めたという大筋は捉えている。

「盒」は蓋付の容器の意で、ここでは印肉盒すなわち朱肉入れのことと思われる。書画をものする文人には必須の文房具であり、別の記事では佩川が画法を学んだ江越繍浦の息子で、長崎佐賀藩邸の用達を務めた淇川（？～一八四四）や筑前芦屋の商人、掛屋長八から「磁盒」を贈られている。前者は中国製、後者は肥前製であった可能性が考えられるが、いずれにしても磁器である。陶器の朱肉入れはあまり一般的ではなく、唐津焼の伝世例はほとんど知られていない。小ぶりの蓋物を朱肉入れとしたのかもしれない。

贈道円三根道円木函二、山元禄盃一、進藤翁窯物一

（文政三年三月三日条）

同じく唐津藩領の儒者、進藤確斎（一七六〇～一八二二）からは「窯物」を一つ贈られた。造り酒屋に生まれた確斎は幼時から学才名高く、多久、塩田、武雄に遊学した。唐津藩主から畑島の庄屋に任ぜられ、のちに相知村に「明倫塾」を開いた。相知天徳山にある彼の墓碑は佩川の揮毫である（山田洋「進藤確斎」『佐賀県人名辞典』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、令和八年八月一四日閲覧）。

確斎が贈った「窯物」がどのようなものであったかは分からない。佩川の日記で陶磁器を指す言葉として最も多く用いられているのが「窯物」である。一ノ瀬山の窯焼大串善五が自らの窯で焼いて佩川に贈ったものにも当てられているとおり磁器も含む。前述の朱肉入れのように産地や器種に言及したものもある一方、焼き物という程度の大まかな意味で「窯物」と称していることのほうが多い。恐らく特筆するほどではない陶磁器をそう表現しているのであろう。もちろん断定はできないが、親交のある他領の学者仲間への贈答品なので唐津藩内で産する陶器であった可能性は高い。

藤士道設饗、招松尾・柴田・田代・相知・大河内諸人接伴、常安九右又在塾・・・主翁恵余等茶碗各一、士道弐以鴨子

（文政五年正月二〇日条）

「藤士道」も進藤確斎のこと。多久から峠を二つほど越えた相知村において確斎が主催し佩川のほか松尾五柳（酒造家）、柴田六郎右衛門（伊岐佐村庄屋）、大河内敬介（明倫塾関係者）ら主に地元の人々を招いた宴会が開かれた。このとき各人に茶碗一口が贈られた。佩川の日記で「茶碗」の語が当てられているのはほとんどが飯碗、湯呑碗・茶呑碗だが、ここでは抹茶碗の可能性も否定できない。産地には言及していないが、確斎が自ら主宰する宴会で地元

や他領の学識ある客人に一口ずつ贈っていることから藩内で産する上手の陶器ではなかっただろうか。ちなみに、このとき在塾していた常安九右衛門は唐津城下京町の日野屋という豪商で、小川島で捕鯨を行なったほか、佐賀本支藩の用達を務めた。

昼出勤、萬屋平兵衛へ唐津茶椀相贈、手代栄吉傘代金弐歩弐朱相払・・・

（安政四年九月四日条）

万屋平兵衛は京都・三条木屋町の商人で多久家の用達として銀子の貸付などを行なっており、天保期に佩川が財政部局の役人だった時の日記には万屋と借銀について折衝した記事が載る。京都と多久とを頻繁に行き来していた万屋は輸送便の役割も担っておりしばしば多久から上方への手紙や物品を託されている。また、安政二～三年に船山が遊学のため京都に滞在した折には万屋が世話しており、その礼に佩川から磁器の盃と刻烟草が贈られた。

船山が万屋に贈ったのは「茶椀」と表記されているものの、唐津焼であると明示されているので正しくは「茶碗」である（船山の日記では「椀」で統一されているので木製品か陶磁器かは文脈から判断するほかない）。船山はこの二年前にも更紗と一緒に「茶椀」を万屋に贈っている。

唐津侯ゟ御目録幷唐津焼床置物拝領、来村次郎作・竹内善平持参。但先般佐嘉ゟ蒸気船御借入方御心配いたし候御謝礼也。

（慶応元年閏五月二〇日条）

唐津藩主・小笠原長国から船山に目録と唐津焼の床置物が下賜された。持参したのは唐津藩士の来村次郎作と竹内善平であった。これは佐賀藩から唐津藩への蒸気船貸出しに際しての「御心配」に対する謝礼であった。

本件のいきさつは唐津藩の市橋卯左衛門が佐賀藩の千住大之助と佩川に当てた一連の書状に詳しい（佐賀県立図書館編、一九八一、『佐賀藩幕末関係文書調査報告書』二七二～二七三頁）。前月、市橋は佐賀の佩川を初めて訪ね、蒸気船の借用を相談した。佩川は隔意なく懇切に応答したらしい。市橋はその内容をすぐに長国へ報告、主君から大坂まで蒸気船を借りる交渉を指示されたため、佩川に千住（ひいては佐賀藩主鍋島直正）へのとりなしを依頼した。数日後には三重津海軍所で蒸気船を見学しており、そのとき実務担当者として現場で調整に当たったのが来村次郎作であった。したがって、「御心配」の主語は船山というより父佩川であった。

唐津焼の細工物は特に江戸後期から明治期にかけて盛んに作られた（写真参照）。型を用いることもあれば用いないこともあり、細部はヘラや指を使って仕上げる。七福神や柿本人麻呂、獅子、虎などが好まれた。中里天祐（十一代中里太郎衛門）の作陶に象徴されるように近代には藩の後ろ盾を失った唐津焼の活路となった。

緊張感をはらんだ政治状況の中、佐賀藩から唐津藩への蒸気船の貸出しという機微に触れるやりとりに唐津焼が一役買ったのであった。

【写真】鉄釉笛吹童子牛置物　肥前／1830－1880年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 髙取家コレクション

【付記】

引用に当たっては読みやすさを考慮して、旧漢字は常用漢字に、片仮名は平仮名に改めた。

【参考文献】

三好嘉子校註・解題、一九八〇、『草場佩川日記』、財団法人西日本文化協会

芳野貴典、二〇二四、「武富圯南『陶器賛並引』及び『詠磁器』」、佐賀県立九州陶磁文化館編『研究紀要』第九号

芳野貴典、二〇二五、「『草場佩川日記』にみる陶磁器の産地と名称」、公益財団法人孔子の里『鶴山書院報』第一八号

水江龍造寺氏と松浦党・鶴田越前守前一族（一）

公益財団法人 孔子の里理事　服部　政昭

『松の塔』の踏査

天山から西方の日鼓岳の山並みは多久市と厳木町の山境で分水嶺でもある。この山境の北側に降った雨は松浦川に集まり玄海灘に流れ、南側に降った雨は多久盆地の中央を西から東へ流れる大川（多久川）を経て有明海に注ぐ。

現在の国道２０３号線の笹原峠には両町の境界があるが、戦国時代の道は何処を通っていたのだろうか？秀吉が朝鮮出兵の際に通った太閤道（唐津往還）の調査を行っている多久市教育委員会文化財担当の高塚啓介氏にお願いし同行させていただいた。

今から四十年前に「多久古文書村」から『水江臣記』を発刊する時に、文中に幾度も出てくる古記録『小侍の戦い』の場所を確認の為に何度も踏査をしたが不明のままだった。

今回は、小侍・番所集落の古老の案内で、鎌と草刈り機を持ち、笹や蔓を払いながら旧道跡を確認し、多久、厳木境のＪＲ唐津線笹原隧道の山頂へ。そこから尾根づたいに東へ歩き、約二百メートルの所で長さ十一メートル、高さ十メートの切通跡を発見。その山腹西側に八基の板碑『松の塔』を確認することができた。その間道が厳木へ通じているかを北側の斜面を山襞に沿って下って行くと、ＪＲ唐津線の中島の踏切と多久厳木自動車道トンネル出口の間に行き付くことができた。道は険しいが厳木の中島から多久の小侍まで馬で山を越える事が確認できた。

松の塔（北多久町小侍）

戦国時代の肥前の國

室町時代に将軍の後継者を争う応仁の乱が起こり、幕府の権威は失墜し、各地の守護や地頭たちが領地を支配し領土の拡大を目指して同盟を組んだり裏切りを繰り返しながら壮絶な戦いを繰り広げる下剋上の時代、龍造寺氏が大きく勢力を広げる時代。

水江龍造寺

この頃、龍造寺氏には三家あり。本城（村中の城）には、隠岐守家和を主として、胤員、胤久、胤家、胤門。家臣には納富、土橋、小川、西村、堀江等なり。その大半は千葉屋形に属せり。その所領凡そ一千三百餘町也。龍造寺八十町、輿賀千町、六郷本庄八十町、其の外、嘉瀬、新庄、巨勢、小城郡なり。

龍泰寺に居する輿賀龍造寺には、胤家、胤直、盛家等、九州千葉氏を支えていた旧臣である。

水江龍造寺氏は、家兼を主として、その子孫、家純、家門、周家、家泰、純家、頼家等、各舘を建て分居する。家兼は、家純の辞退を聞入れて惣領を家門に譲り、家兼は東舘（天神屋敷）に移り、家門は本館（今の乾亨院）に、家純は中舘に住居、西舘には純家、其外御同居あり。そもそも當國は太宰少貳氏の所領なり。

亨禄三年（１５３０）、中国の大内義隆が兵を遣わして少貳を伐つ。家臣、陶尾張入道麒、杉豊後守興運（宰府代官）大将たり。先陣は筑紫尚門、朝日頼貫来て、米多原に陣す。少弐屋形は、龍造寺の一族に命じてこれにあたらせる。龍造寺の戦功を賞して川副一千町を賜る。

天文三年（１５３４）、大内義隆、老臣陶尾張入道道麒を大将して数萬の軍兵を属し、又少貳を伐しむ。道麒来て三津山に陣す。少貳屋形、又兵を水江に請う、水江是に應ず。少貳資元、龍造寺家兼の大功を賞して小城、佐嘉に於いて數懸を加封せらる。巨勢、尼寺、大町、小城等の地、水江に附せしは、此時ならんと。

上松浦へ侵攻

龍造寺の勲功と領地拡大を妬んだ少貳家の旧臣馬場頼周は、肥前の守護代となった少貳冬尚を調略し、天文十三年（１５４４）千葉・龍造寺に命じて西肥前を退治のために多久・松浦を侵攻させた。龍造寺の軍は、軍を三手に分け、水江よりは周家公を大将として一族郎従等を率い進て多久城を攻める、城主多久藤左衛門宗時、忽ち利を失い南の方、有馬、に奔る。周家代わって城を守る。多久の地士、相浦、土橋等の輩来たり従う者多し。是、我祖の多久に入るの始めなり。

冬十一月、千葉介（西千葉、晴気城）は、千葉胤勝軍を率いて龍造寺盛家、高木監房（盛家の子）父子一族数百人先陣として二十二日大川野の城を攻めるが、城主の鶴田直の軍に敗れて惨敗。這う這うの体で、漸く高木の館に逃げ帰った。

後の一手は、龍造寺和泉守家門が総指揮をとり、子息頼純、右京亮胤直らを付けて長島・塚崎へ向かせた。

八戸氏の謀反

弘治三年（１５５７）正月龍造寺隆信、八戸の城主八戸宗暢を征伐する。宗暢は隆信の妹婿であった

が、山内の神代勝利と手を握り、大友氏に通じていると噂が立った。宗暢は三瀬の杠山に逃げたが戦傷が元で、四日後に死去した。宗暢の知行地と八戸城、長信の嫡男。水江龍造寺五世六郎次郎家久が継いだ。

天正十八年（１５９０）の記録に『肥前の七城』が（白石町史）に残っている。

須古城　龍造寺彦右衛門信周
黒髪城　後藤善次郎家信
伊佐早城　龍造寺七郎左衛門家晴

八戸城　鍋嶋飛騨守直茂

蓮池城　鍋嶋豊前守信房
恒広城　神代次郎
芦ヶ里城

この年、秀吉御朱印の知行は

小城郡の内　多久・別府・納所・北浦・深川、江里山・初田ケ里
杵島郡の内　志久・北方・医王寺・福母・喜佐木大渡・焼米・山口・砥川・椛島
佐賀郡の内　尼寺・上嘉瀬・萩野・八戸・真木・木原・竹藤・南里・新郷・鹿子
三根郡の内　矢俣

全知行高は、三万二千八百余石、

慶長十六年（１６１１）鍋島勝茂の命により全家臣に自領地の三割を差し出させる。**（三部上地）**

元和七年（１６２１）には、（龍造寺四家に対してのみ）さらに三部上地が言い渡される。これは三年間のみで三年後には、返却される約束であったが、ついに永久に戻らず、残った村の知行高は、二万一千四百余石となった。

龍雲寺（元、八戸城、佐賀市八戸町）

丹坂峠の戦い

永禄五年（１５６２）、西肥前島原の有馬義貞（有馬仙岩）は、千葉、龍造寺を討って佐嘉、小城の地を合わせ領せんと子息義直を大将とし、大軍を遣わし丹坂峠に攻めて来た。千葉胤連及び鴨打、徳嶋、空閑、持永、窪田、野田、西持院、佐嘉方に一味し牛津江の境を守る。上松浦獅子城主鶴田越前守前も隆信の加勢として一本松（晴気峠）に陣す。七月下旬、隆信は未明に兵を出し、一戦を丹坂の陣で討破り、右原に追詰め討取る首数を知らず。有馬一族安徳上野介を始め数十人討死し、又、松瀬川に溺れ死するもの若干なり。

隆信、長信両公は、勝に乗じ直ちに多久城に発向せらる。軍を二手に分けられ、　長信公は追手長尾口、隆信公は搦手中山口を均しく進み、長尾両門の村長、米満、倉富等支え防ぎしか共、長信公忽ち是を打ち破りて多久城に押し詰められる搦手の軍と同時に城を攻め奮戦す。城兵悉く討破られ城主多久上野介力尽きて間道より南山を越え須古に奔る。多久氏爰に於いて領地を失う。

龍雲寺の多久家墓所

鶴田賢人質となる

獅子岳の城主鶴田越前守前に二心を抱くの聞こえ有りにより試しに是を招かる越前守嫡子神五郎（刑部太輔上総介）を人質として異心なきを現す公大に悦び神五郎を小城郡納所村に居かれ重臣蒲原上総介に監視及び教育をさせた。

翌年八月越前守神五郎が加冠を公に請うて刑部太輔賢と名乗る上総介と称し天正の末、五郎左衛門尉と改む。法名三清。波多の改易の後、多久家に属す。又、古橋一遊軒と相謀り堤尾岳に夜懸して有馬衆の本陣を討破る。是、右原合戦の夜なり。有馬の兵、横邊田に敗戦する。

此以後、山口村多久領となる。

一國一城令

慶長二十年（１６１５）、居城以外のすべての城の破却が命じられた。八戸城は勿論のこと、肥前の国には多くの城があったが、この時殆どが壊され廃城となった。肥前の国では、佐嘉城（龍造寺村中城）が残され、その三の丸、北の丸に、龍造寺一門の住まいが、それぞれ、諫早屋敷、武雄屋敷、須古屋敷として設けられた。多久屋敷は二の丸に設けられていた。

（つづく）

【参考資料】

水江事略（多久市郷土資料館所蔵）
丹邱概史（多久市公民館）　昭和三十五年発行
白石町史（白石町史編纂委員会）　昭和四十九年二月十日発行
水江臣記（多久古文書の村）　昭和六十一年十一月発行
北肥戦誌（青潮社）　一九九五年一月一日発行
肥前鶴田氏の研究（鶴鳴社　鶴田徹）　平成二十七年四月発行

華表を仰ぐ

多久市郷土資料館長　藤井　伸幸

第七回　北方町大﨑八幡社の鳥居
（江戸時代多久領の神社　福與河海　德筆乾坤）

大﨑八幡社（江戸時代の多久領絵図では北方八幡社）は、県道多久武雄線と旧長崎街道が交差する地点（大﨑交差点の北）から西北西へ約２５０ｍに位置しています。

多久の儒学者深江順房が、江戸後期に執筆編集した多久の地誌『丹邱邑誌』によれば、「鎮守八幡宮［神躰束帯木像三體一躰應神天皇相殿詳ナラス］北方駅北岸上ニ在リ 南面宝殿…拝殿…鐘楼神門一基：祠務聖恩寺［真言宗大聖寺末］境内一段五畝…親族［藩廷番頭］多久伊織安廣ノ免許地 祭九月十九日…又十一月十五日祭アリ」と記されています。

この部分は、「鎮守八幡宮（現在の大﨑八幡社）、神体は束帯の木像三体があり、一体は応神天皇で相殿の神は不明です。北方駅（宿場）北側にあり、社殿は南に面し、宝殿…拝殿…鐘楼、神門（鳥居）一基があります。…祠（社）務は聖恩寺［真言宗大聖寺の末寺］が担当しています。境内は一段五畝の広さで、…（多久家）親族［藩廷番頭］の多久伊織安廣の免許地（税の免除地）になっています。祭礼は九月十九日…また十一月十五日にあります。」と解釈できます。

（正面右の柱に刻まれた銘文）　□は残存する字画から推定した文字
□内は読めない文字

鎮護肥前國杵嶋郡北方村
八幡大菩薩寶前
菩薩唱曰
得道來不動法性　示八正道垂□跡
皆得解脫苦衆生　故号八幡大□□
以是鑑之則豈輒俗之一端而已□可
謂其德大矣所以疆里之士民勛力同
志奉建立石華表二柱
仰冀
洽祛殃消　浴上泰下安之神澤
雲行雨施　蒙九穗兩岐之天恩

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

肥前國杵嶋郡北方村を鎮護する
八幡大菩薩の寶前
菩薩は唱えて曰く
得道し來たる不動の法性
八正道を示し檯跡（迹）に垂んとする
皆く 苦しむ衆生に解脫を得（せ）しむ 故に八幡大菩薩と号す
是を以て之を鑑れば 則ち豈に輒俗の一端とのみ□べきか
其の德大いなるを謂う 疆里の士民勛力に同じ所以なり
石華表二柱を建立し奉ることを志す
仰ぎ冀う
洽祛と殃消　上泰と下安の神澤に浴せんことを
雲行き雨施し　九穗兩岐の天恩を蒙らんことを

現代語訳の案は次のとおりです。

肥前国杵島郡北方村を鎮護する八幡大菩薩の御宝前。
大菩薩は唱えて言われた。
仏道の道を開いてより、少しも揺るがない法性（万物の真理）。
涅槃に至る八正道を示し、権化になろうとしています。苦しむ衆生に、解脱の道を、ことごとく与えようとしています。ゆえに八幡大菩薩と称しています。
ここにこれを見る時、どうして俗世の教えの一端とのみ（いう）べきであろうか。
（仏道の）德が大いなるをいうのは、領域士民の功績をいうのと同じ事由です。
石華表二柱を建立し奉ることを記します。
仰ぎ冀います。
妖気を祓い災禍を消し、上下安泰の神の恵沢に浴すことを。
雲は行き雨が施し、［穀物の］九穂に二股茎の天恩をいただくことを。

（正面左の柱に刻まれた銘文）

銘曰
婆伽神變　菩薩同渾
方便爲竟　大悲爲根
金剛内庫　解脫表門
愼排両賊　酬三事恩
烈々家運　縄々子孫
福與河海　德筆乾坤
延寶六戊午暦卯月上旬吉日
當宮司大聖寺沙門法印寛慶勒誌　書
代社務聖恩寺法印□□
領主多久長門守　藤原茂矩朝臣
嫡子多久伊豆守　藤原茂文朝臣
代官南里□□左衛門尉藤原和忠
石工江頭與兵衛尉藤原秀充

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

銘に曰く
婆伽（梵）の神變　菩薩の同渾
方便は竟と爲し　大悲は根と爲す
金剛は内庫され　解脫は表門より
両賊を愼排し　三事恩に酬いる
烈々たる家運　縄々たる子孫
福は河海を與え　德は乾坤を筆す
延寶六（１６７８）戊午暦卯月上旬吉日
當宮司で大聖寺沙門法印の寛慶が勒し書す　代社務は聖恩寺法印の□□。
領主多久長門守の藤原茂矩朝臣と嫡子多久伊豆守の藤原茂文朝臣。
代官は南里□□左衛門尉藤原和忠、石工は江頭與兵衛尉藤原秀充。

現代語訳の案は次のとおりです。

銘文に申し上げる
覚者仏陀の神通力　菩薩とは渾然一体
方便は究極の目的であり　大悲は根本原理である
金剛は［のごとき悟りと功德は］内蔵され　表門［三解脱門］より解脱に至る
両財（白銀と資産）を遠ざけ
三事恩（父母衆生三宝）にむくいる
勢いある家の繁栄　連綿と繋がる子孫
福は河海を授け　德は乾坤（天地）を描く

『大聖寺文書』によれば、宮司寛慶は大聖寺第五代で、代社務聖恩寺法印□□は、聖恩寺第二代慶算と考えられます。

代官南里□□は、『多久諸家系圖』の該当年代からすると南里三郎左衛門と推定されます。

なお、右柱下部には34名以上、左柱下部には27名以上の人名が刻まれていますが、判読できるのは姓のみです。また、鳥居の額束には「八幡宮」と刻まれています。

大﨑八幡社鳥居

歴史を紡ぐ孔子廟の絆

～未来へ向けた共通価値の創造～

公益財団法人 孔子の里事務局長　亀川　将平

一　研修の目的と概要

職員研修（令和8年6月10日～11日）として岡山県にある特別史跡旧閑谷学校を訪れた。本研修の最大の目的は、現地を見学することはもちろん、全国でも稀有な「孔子廟を有する歴史的施設」同士として相互の交流を深め、管理運営や地域活性化における連携の端緒を開くことにありました。多久と備前。離れた地でありながら同じ儒学の精神を今に伝える両者が未来へ向けて協働できるか。車中での事前学習を通じて双方の共通点や差異を整理しながら、期待と熱意を胸に現地を目指しました。

二　歴史的景観と先人の教育情熱

現地に到着すると、心地よい水のせせらぎと、美しく整備された緑豊かな敷地が私たちを迎えてくれました。日光が優しく差し込むよう計算された巧みな配置により、境内はとても明るく、背後の山々や木々と見事に調和しています。この空間構成そのものから、先人たちの教育環境に対する深いこだわりが伝わってくるようでした。

特に目を引いたのは、敷地を囲む名物の「石塀（せきへい）」です。その圧倒的な存在感と洗練された曲線美に息をのむと同時に、屋根を彩る「備前焼瓦」の独特な赤褐色の風合いが、自然の中で荘厳さをより一層際立たせていました。

国宝に指定されている「講堂」に一歩足を踏み入れると、そこは別世界の静寂に包まれていました。最高級の木材を使用し、傷一つなく美しく磨き上げられた床には、特徴的な「花頭窓（かとうまど）」から差し込む柔らかな光と周囲の新緑が幻想的に反射していました。

堂内を吹き抜ける心地よい風と静けさの中で、かつてここで学んだ人々の息遣いが聞こえてくるような、強い臨場感を覚えました。

聖廟（孔子廟）の視察では、多久聖廟との興味深い対比がありました。規模自体は多久と比較して小ぶりですが、ヒノキやケヤキを贅沢に使用した造りであり、内部には、多久聖廟の青銅製とは異なる、神々しく輝く金色の「孔子像」が安置されていました。多久聖廟の孔子像とは兄弟像にあたり、京都の中村惕斎が双方の制作に関与している。新しい発見として、通常配置される「四配（しはい）の像」がないということに驚きました。また、多久の学問所である東原庠舎とは異なり、わずか一年間という限られた期間の中で死に物狂いで学問に励んだ講堂は、静寂の中にこそ真理があるという、当時の学徒たちの研ぎ澄まされた集中力を物語っているかのようでした。

三　共通する課題と、共に歩む意義

今回の研修における最大の収穫は、現地関係者との意見交換を通じて得た、組織としての深い共感と気づきです。旧閑谷学校と多久聖廟を管理しているのは、共に行政から委託されている公益財団法人であり、自然豊かな立地や伝統行事の継承など、驚くほど多くの共通点を持っています。そして同時に、「文化財の保存継承」「安定的かつ持続可能な運営」「次世代への教育的価値の伝達」という、私たちが現在直面している経営課題の多くが共通していることも再確認できました。これらの課題は、一団体だけで抱え込むには重いテーマです。しかし、同じ志と歴史的価値を共有するパートナーとして手を取り合い、成功事例やアイデアを共有し合うことで、共通した課題をクリアするための強力な協力関係が築けると確信しました。ここに、私たちが今、繋がる本当の意義があります。

今後は、双方の情報交換の定期化を考えています。多久聖廟と旧閑谷学校は、時空を超えて響き合う「よき相談相手」に成り得るはずです。これからも共に歩みを進め、地域に愛され、未来へ引き継がれる教育・文化の殿堂として共に繁栄していけるよう、今回の学びを日々の事務局運営に力強く還元してまいります。

2026年度　講座案内

多久の歴史と文化を学ぶ講座

市内外から素晴らしい講師陣を迎え、それぞれの専門的見地から多久を知ることができます。

定員 50人　会場 東原庠舎　時間 13：30～15：00　受講料 500円／各1回

令和9年 2/6(土)

多久家当主夫人の文事と鹿島藩

多久家文書に伝来する「柏岡太夫人七十賀祝献詩歌」を取り上げ、編纂に関与した多久雍子（多久家11代当主茂族夫人）と篤誠院（柏岡、鹿島藩9代藩主夫人）との関係に注目しながら、歌集が編纂された背景やその意義について紹介する。

講師 鹿島市民図書館 学芸員 高橋　研一

令和9年 1/23(土)

唐津炭田石炭産業沿革史 -燃える石250年の歩み-

佐賀県は県西部を中心にかつて多くの炭鉱が操業していました。唐津炭田南部に位置する多久市は、江戸時代中期の石炭発見から昭和四十年代の炭鉱閉山に至るまで、二百五十年近くにわたり石炭産業と共にあったといえます。講座では、唐津炭田を中心とする佐賀県や多久市の石炭産業の歩みを振り返ります。

講師 佐賀県立佐賀城本丸歴史館 学芸員 都留　慎二

令和9年 1/16(土)

肥前名護屋の豊臣秀保陣跡 －豊臣秀長の後継者、肥前名護屋最大の陣－

文禄・慶長の役において国内軍事拠点となった肥前名護屋。現在、豊臣秀吉の居城である名護屋城を中心とした半径約３㎞内には、約160箇所もの諸大名陣跡が確認されています。その中でも、秀吉の弟秀長の後継者である秀保の陣は、最大規模を誇り、遺構も良好に残存しています。本講座では、その豊臣秀保陣の具体像に迫ります。

講師 佐賀県立名護屋城博物館 副館長 武谷　和彦

※この講座の事前申込は不要です　受講希望の方は、当日東原庠舎へお越しください

鶴山塾講座 Kakuzan

中国古典の扉 全10回 随時受付

開講日	10/6(火)、11/10(火)、12/1(火)、1/5(火)、2/2(火)、3/2(火)
時　間	10：00～11：30
会　場	東原庠舎
受講料	500円/１回(材料代も含む)
定　員	20人
講　師	公益財団法人孔子の里　理事　武田　耕一

この講座では難しそうなイメージのある『論語』を中心に『孟子』や『史記』などの中国古典も織り交ぜながら、知識ゼロで楽しく学べる講座です。

楽しもう短歌 全10回 随時受付

開講日	10/1(木)、11/5(木)、12/3(木)、1/7(木)、2/4(木)、3/4(木)
時　間	10：00～12：00
会　場	東原庠舎
受講料	500円/１回(材料代も含む)
定　員	15人
講　師	日本歌人クラブ佐賀県幹事　角本　久子

日々の暮らしや自然の移り変わりで感じたことを短歌にしてみませんか。「楽しもう短歌」は、初心者の方も基礎から学べます。みなさんで感性豊かに短歌を作って楽しみましょう。

古文書教室 全10回 随時受付

開講日	10/3(土)、11/7(土)、12/5(土)、1/9(土)、2/6(土)、3/6(土)
時　間	10：00～12：00
会　場	東原庠舎
受講料	500円/１回(材料代も含む)
定　員	20人
講　師	多久古文書の村　舌間　輝吉

古い手紙や博物館の古文書などを読んでみたいと思われる方も少なくないと思います。本講座では、くずし字など読みにくいところを確認しながらゆっくりと進めて参ります。初心者の方も気軽に参加しやすいと思います。

ゆい工房講座 TAKU CITIZEN COLLEGE YUI KOUBOU

本格蕎麦打ち（後期）

本格的な道具を使って二八蕎麦を打ちませんか。先生は「塩田津ソバの会」を立ち上げ、県内外で蕎麦打ち指導をされておられます。「皆さんに蕎麦打ちを楽しんでもらえたら･･･」そんな想いの先生と本格蕎麦打ちを楽しみましょう。打った蕎麦はお土産に！

開講日 12/2(水)
時　間 9：00～13：00
会　場 中央公民館
材料代 2,500円
定　員 15人
講　師 塩田津ソバの会 岸川　和則
申込み締切日 11/25(水)

はじめての中国茶

中国茶って難しそう？いえいえ、まずはゆっくりと味わってみませんか。日常を離れて、静かにお茶を楽しむ時間をご一緒しましょう。香りにふれ、ひと口ずつ味わいながら、五感で楽しむひとときです。はじめての方も安心してご参加いただけます。

開講日 11/12(木)
時　間 10：00～12：00
会　場 東多久公民館
受講料 2,000円(材料代も含む)
定　員 15人
講　師 一般社団法人日本中国茶文化交流協会 認定講師 樋口　由美子
申込み締切日 11/5(木)

麹を楽しむ二種の発酵調味料作り

心と身体を整える発酵ワークショップ。麹は酵素の力で食材の旨味を引き出し消化を助け腸内環境を整える日本の伝統発酵素材です。その麹を使ってさっぱりトマト麹とクリーミーゴマ味噌麹を作りお持ち帰りいただきます。簡単な発酵試食つきです。

開講日 1/20(水)
時　間 10：00～12：00
会　場 東多久公民館
受講料 2,500円(材料代も含む)
定　員 12人
講　師 冬こうじ夏おかし古門　麹士 木下　智香子
申込み締切日 令和9年1/10(日)

消しゴムはんこを彫って、ぽち袋を作ろう！

消しゴムをカッターで彫って、来年の干支「未」のはんこを作ります。その他にも、お正月らしさのある図柄の消しゴムはんこを準備しますので、自分で彫った干支のはんこと一緒に押して、オリジナルのぽち袋を作りましょう！

開講日 12/16(水)
時　間 10：00～12：00
会　場 東多久公民館
受講料 2,000円(材料代も含む)
定　員 15人
講　師 消しゴムはんこ作家 野田　宏美
申込み締切日 12/9(水)

鶴山塾・ゆい工房は事前申し込みが必要です。
各講座の申込み締切日までに孔子の里へお電話をお願いします。
なお、多久市外の方も受講できますので、皆さまのご参加お待ちしております。

【申込み・問合せ】TEL 0952－75－5112
（9：00～17：00　お盆、年末年始、月曜日を除く）

来訪・来信・雑録

4月14日　学校関係者釈菜練習
4月16日　春季釈菜総練習
4月18日　春季釈菜
　韓国儒教文化普及院訪日団釈菜視察
4月27日　公益財団法人孔子の里決算監査
4月28日　理事会について理事長・事務局打合せ
5月7日　令和8年第1回理事会
5月26日　令和8年定時評議員会
　有田町同朋・同朋広瀬保育園来訪（論語素読会）
6月2日　鶴山塾「中国古典の扉」
　（講師：武田　耕一　公益財団法人孔子の里　理事）
6月4日　鶴山塾「楽しもう短歌」
　（講師：角本　久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
6月5日　伊万里同朋天神保育園来訪（論語素読会）
6月10日（～11日）職員視察研修（岡山県　閑谷学校訪問）
6月13日　孔子の里ジュニアガイド第22期生入学
　鶴山塾「古文書教室」
　（講師：舌間　輝吉　多久古文書の村）
6月27日　多久の歴史と文化を学ぶ講座「紫式部・和泉式部・小式部物語」
　（講師：藤井　伸幸　多久市郷土・歴史民俗・先覚者資料館館長）
7月2日　鶴山塾「楽しもう短歌」
　（講師：角本　久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
7月4日　鶴山塾「古文書教室」
　（講師：舌間　輝吉　多久古文書の村）
7月7日　鶴山塾「中国古典の扉」
　（講師：武田　耕一　公益財団法人孔子の里　理事）
　論語カルタゲーム制作者大石浩平氏理事長（市長）、教育長訪問
7月8日　韓国学中央研究院共同研究チーム来訪
　ゆい工房「花おはぎ作り」
　（講師：林　眞由美　和なはアートフード協会　認定講師）
7月11日　嚶鳴協議会事務局（東海市、釜石市）来訪
7月22日　孔子の里芸能保存会代表者会議
7月24日　評議員選定委員会
7月26日　ゆい工房「貝がらのフォトフレーム作り」
　（講師：柄本　良子　元学童支援員）
7月30日　九州大学社会教育主事講習現地研修（東原庠舎）
8月1日　鶴山塾「古文書教室」
　（講師：舌間　輝吉　多久古文書の村）
　多久の歴史と文化を学ぶ講座「草場船山の政治思想－『蟄蜂之吟』を読む－（後編）」
　（講師：芳野　貴典　佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員）
8月4日　鶴山塾「中国古典の扉」
　（講師：武田　耕一　公益財団法人孔子の里　理事）
　孔子の里芸能保存会総会
8月6日　鶴山塾「楽しもう短歌」
　（講師：角本　久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
　多久市教職員及び職員現地研修会（東原庠舎）
8月12日　多久聖廟御朱印販売開始（多久市観光協会）
9月1日　鶴山塾「中国古典の扉」
　（講師：武田　耕一　公益財団法人孔子の里　理事）
9月3日　鶴山塾「楽しもう短歌」
　（講師：角本　久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
9月5日　鶴山塾「古文書教室」
　（講師：舌間　輝吉　多久古文書の村）
　多久の歴史と文化を学ぶ講座「石井鶴山の「帰鞍漫稿」」
　（講師：中尾　健一郎　熊本大学　教授）
9月17日（～19日）生活体験学習（通学合宿）
9月25日　秋季釈菜委員会

◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。

ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- **会員の種類**
  個人賛助会員　年会費　一口　３，０００円
  法人賛助会員　年会費　一口　１０，０００円
- **入会申込み・お問い合わせ**
  〒846－0031　多久市多久町1843番地3　東原庠舎内
  公益財団法人 孔子の里 事務局
  電話 0952－75－5112　FAX 0952－75－5320
  E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
  詳細は当財団ホームページをご覧ください。

孔子の里　検索

令和8年度多久聖廟 秋季釈菜のご案内

日時：令和8年10月25日(日)

場所：多久聖廟

① 10時～　執事・伶人　入場
② 10時20分～　献官・祭官　入場
③ 10時30分～　釈菜（せきさい）
④ 11時30分～　釈菜の舞、参列生徒の唱歌、幼児太鼓、花棒舞、孔子の里腰鼓、釈菜の舞、孔子の里獅子舞

「論語かるたゲーム」の紹介

公益財団法人孔子の里では、孔子の教えである論語をわかりやすく、親しみやすくするために百人一首式にしたかるたを作成しています。市内の学校では、論語教育の素読・暗誦・検定などの学習教材としてこのかるたを活用しており、論語かるた大会も開催しています。

このかるたを手軽に楽しめるよう市内在住のＷｅｂ制作、デザイン、イラスト制作などの事業を行われている大石浩平さんが「論語かるたゲーム」を作成されました。

大石さんはお子さんの論語かるたのスキルアップのために自ら作成されたということです。作成にあたってはお子さんの率直な要望を取り入れ侃々諤々意見を交わしながら作成されたそうです。

その結果、子どもでも親しみやすいイラストを活用されたり、漢字が読めない子どものためのひらがなモードが追加されたりしています。イラストも市内の特産品を擬人化したかわいいイラストになっており大変すばらしい内容となっています。

この「論語かるたゲーム」を制作者の大石さんのご厚意により、無償で提供いただけることとなりました。

ゲームは、完全無料、インストール不要、アカウント登録不要でどなたでもパソコンやスマートフォンで楽しむことができます。市内学校でも子どもたちに配布しているタブレットで活用できるようになります。

ゲームは当財団のホームページの「論語かるたゲーム」のリンク又は下の二次元コードからお楽しみいただけます。

編集後記

近年外国から多久聖廟を訪れられる機会が増えたような気がします。一般の観光客ではなく儒学や中国哲学の研究者の方々です。

令和７年12月台湾大学、令和８年４月韓国儒教文化普及院、令和８年７月韓国学中央研究院からなどいずれも多久聖廟で三百年以上の長きにわたり続けられている釈菜行事や多久市先覚者資料館の「廟山文庫」で保管されている論語など儒学関係の古い書籍がきちんと保存されていることなど地域で長年守ってきた文化を高く評価いただいています。

これまで先人が守ってきたこれらの文化を次世代まで大切に引き継いでいくことが現在我々に課されている使命です。そのためには、今後この文化を継承していく人材づくりも必要になってきます。

現在市内の義務教育学校では多久市ならではの学習「多久学」として論語や多久市の賢人の学習、釈菜等の伝統行事の参加など郷土への愛着心と誇りを育む学習に取り組んでいます。上段で紹介した論語かるたゲームも論語を学ぶ教育の中で、もっと論語かるたを上手になりたいという熱意から生まれたものだと思います。

多久市が標榜する文教の里づくりが今後も多久の文化の継承につながっていけばと思います。

（む）

台湾大学の研究者の先生方と（先覚者資料館訪問時）

多久の百景

「くど造り民家のある光景」（佐賀県嬉野市 中村　淳）
ふるさと写真コンテスト特別賞作品

「秋色　東原庠舎界隈」（佐賀県小城市　大坪俊治）
ふるさと写真コンテスト入選作品